

プロジェクトの概要

琉球大学島嶼地域科学研究所

狩俣繁久

本書は、令和2年度の文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」の成果を報告するものである。

我が国における消滅の危機にある言語・方言について、ユネスコが平成21年に発行した“Atlas of the World's Languages in Danger”の内容及び、平成23年度から平成26年度にかけて大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所及び琉球大学島嶼地域科学研究所が実施した文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業」及び「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実体に関する調査研究事業」を参照の上、消滅の危機にある7つ（八丈方言、奄美方言、国頭方言、沖縄方言、宮古方言、八重山方言、与那国方言）の区画において、音声資料や映像資料、調査研究が不十分な区画内の地域の方言について当該地域の方言の保存・継承に資するため、アーカイブとしての公開を想定した実地調査及びその分析（以下、アーカイブ研究）、方言の保存継承に資する諸研究（以下、保存継承研究）を行った。

本年度のアーカイブ研究は、琉球大学島嶼地域科学研究所が昨年（平成元年）度を実施した方言資料の蓄積の少ない、奄美語の奄美大島北部笠利町佐仁方言と徳之島伊仙町方言、国頭語の伊是名島方言と伊江島方言、沖縄語のうるま市宮城島方言と粟国島方言、八重山語の石垣島川平方言と波照間島方言を対象にした。本事業で調査対象地としている上記8地点でのアーカイブ研究は2年計画のもので、その2年目の本年度は、方言継承に重要な文法的特徴のうち、形容詞と述語名詞の活用体系と形容詞語彙の調査、名詞の格助詞ととりたて助詞の概要についての臨地調査、資料収集を行った。

今年度は、COVID-19の感染の拡大の影響を考慮し、臨地調査と遠隔調査を併用して実施することとした。遠隔調査は、ZOOMを使った調査と調査票を郵送して行う調査を計画した。しかし、小離島の調査対象地点では渡航制限が長く続き、渡航の叶わなかった地点があった。情報提供者が高齢であるため、渡航が可能な地域でも臨地調査の実施が困難であった。遠隔調査のみの実施も検討したが、高齢のため遠隔調査に難色を示し、臨地調査、遠隔調査のいずれも実施できない地点もあった。そんな状況の中で、笠利町佐仁方言、伊是名島方言、粟国島方言、うるま市宮城島方言、石垣島川平方言では予定の調査を完了できなかった。なお、当初予算の範囲内で実施可能な代替地点を選定してアーカイブ研究を年度途中から進めた。代替地点は、国頭語の名護市久志方言、宮古語の宮古島市平良西里方言と宮古島市上野野原方言、八重山語の石垣島石垣市石垣方言である。

調査票を郵送した調査は以下の手順で行った。まず、話者の方に調査票を郵送し、そこに記した標準語の例文を話者自身が方言に訳して仮名文字で記入し、返送してもらった。返送された調査票のデータを入力する過程で見つかった疑問点や確認すべき事項を赤い文字等で記入して話者に再度郵送した。話者は確認事項への回答を記入して返送した。その調査票のデータの修正等の整理作業を進めた。

本アーカイブ研究のために作成された調査票は、動詞活用形 215 例文、動詞活用型 186 例文、形容詞と述語名詞の活用形 144 例文、形容詞語彙 137 例文、名詞の格助詞ととりたて助詞の 116 例文の計 5 冊である。動詞と形容詞と述語名詞の調査票を使用した調査では、終止形、連用形、連体形、条件形等の複数の活用形が得られ、それによって活用体系の把握が可能になる。さらに、動詞、形容詞、述語名詞の肯定形式だけでなく、否定形式の活用体系の把握が可能なるようにそれぞれの品詞で複数の例文を作成した。これによってこれまで等閑に付されてきた否定形式の解明が可能になる。文法的な意味の記述を助けられるよう具体的な場面を設定するよう意図しつつ、「姉さんが東京から来る。」「姉さんはいつ来るの?」「明日来る。」等の動詞述語文、あるいは、「豚肉と山羊肉はどっちがおいしいの?」「山羊肉より豚肉がおいしい。」「今日の夕ごはん、おいしくなかったの?」「味噌汁はおいしかったけど、おかずがおいしくなかった。」等の形容詞述語文を対話形式になるよう並べてある。一つの例文に主格や対格等の格助詞やとりたて助詞が複数含まれる。条件的複文や連体修飾的複文等は条件形や連体形の活用形も、テンス、アスペクト、モダリティ等の主文の活用形も得られる。2 年間の調査研究によって、当該方言の文法に関する基礎的で総合的な成果を記録保存することが可能になり、継承活動に大きな貢献をなすものとする。

本年度の保存継承研究は、「唄・三線としまくとうば習得」をテーマに調査を実施し、唄・三線（島唄）を習うことが、学習者のしまくとうば習得に寄与するか、唄・三線を習うことがしまくとうば習得にどのような影響を与えるのかを調べることをテーマに、沖縄県沖縄本島と鹿児島県奄美大島での調査を計画した。

しかし、アーカイブ研究と同じく COVID-19 の感染拡大の影響を大きく受けた。奄美地方での現地調査は、年が明けた 2 月になってようやく渡航することができたという状況であった。沖縄地方のインタビュー調査は実施できたが、COVID-19 の影響で協力者は 2 名への ZOOM によるインタビュー調査に限定せざるを得なかった。2 名ともに唄・三線を習い始めた時に沖縄語が全く分からず、習っている民謡の歌詞の意味を理解していなかった。しかし、現在は 2 名ともに自分が歌う民謡の歌詞の意味は理解している。唄・三線がしまくとうば学習の入口になることが確認できた。2 名の協力者は自身の学習経験から「唄・三線を習うことは、ウチナーグチの習得に効果がある」と語っており、さまざまな動機で唄・三線を習い始めても、意味を理解して「ちゃんと」唄えるようになりたいと考える人は、しまくとうばを習得する可能性が高いことも確認できた。危機言語財団の 2015 年第 19 回の大会テーマ「消滅危機言語の音楽」で基調講演を行なった Zarasky, Suzanna や研究発表した Antoine, Jurgita などが示すように危機に瀕している言語や文化を維持継承していくために昔から歌われている歌を教材として活用することの意義や効果を再検証することが必要であることを確認した。詳しくは本報告書の石原昌英の記述を参照いただきたい。

アーカイブ研究及び保存継承研究の結果については、令和 3 年 2 月 14 日に ZOOM による遠隔の成果報告会を開催し、報告書原稿執筆のための意見交換と討議を行った。本事業の調査研究の成果については、琉球大学の島嶼地域科学研究所の HP に開設した HP で公開する。合わせて、事業報告書を作成し公表するものである。